

ニッセンケン分室「思いつきラボ」No. 46

## 注染の工房で手拭染体験をしてきました・・・



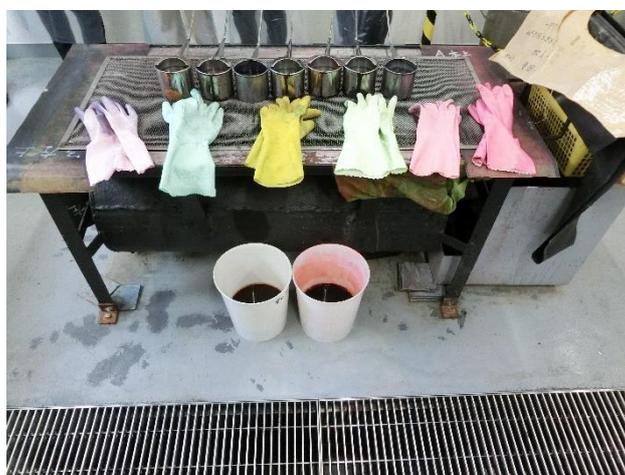
筆者が所属するラボが東京葛飾区の立石にあるのですが、ほんのすぐの所に注染（ちゅうせん）の工房があったのです。数年間通っているにもかかわらず気が付かなかったとはいかに行動範囲が狭いかが分かります。しかも同じ4丁目で徒歩数分の距離なのに・・・。注染は手拭い（てぬぐい）などの染め付けに使われる手法で、しかも体験講座があるという案内があったので、早速立石ラボのメンバーに声を掛け申し込みをしてきました。今回はその体験教室の報告になります。

筆者は繊維業が盛んな大阪 堺の出身で業界に身を置いていることもあって地元では物産展などで注染の紹介や手拭いの販売をよく見掛けることもあります。それでも注染の体験講座となると聞いたことがなかったので、これは貴重な経験になるのではと思ったのです。葛飾 立石は美味しい店の多い下町情緒の雰囲気浸（ひた）れる街としてテレビや情報雑誌などによく取り上げられていますが、伝統のある染技法を伝える工房もありほんとに立石は素晴らしいところなのです・・・と続けていると我が街自慢みたいな原稿になりそうなのでテーマに戻します。

### 注染 体験記です

注染はペースト状の糊で柄模様を囲んで防染し重ね上げた生地の上から染料を注ぎ、模様部分を染め上げる型染め手法です。囲んだのりが堤防の役割をしてそれぞれの色が混じり合わないようにになっています。注いだ染料はバキューム機で瞬時に吸い込まれるので重ねた布地の一番下まで染料が通ります。防染しているので色数も自由に増やせられますし、2色同時に差してぼかしを表現することも可能なのです。

ということで実際に体験してきたことを紹介していきます。



1 注染の工房に集合



2 エプロン 靴を準備



エプロン、長靴で準備 OK だぜ！

3 作業内容と注意事項



4 ビデオで工程学習



5 工房に入って実践



いざ実践！

6 ヘラを使って糊付け



均等に力を入れるのが難しいぜ！

7 生地 of 折り返し



ぴったり重なるように折り返して…

8 順に重ねて糊付け



型もずれないようにのせて…

9 最後におがくずを付ける



各々のスタンスで悪戦苦闘！



10 柄模様ごとに土手囲い



染料が流れ出ないようにしっかり囲むぜ！

11 いよいよ注染の準備



腕がなるぜ！

12 説明を受けてリハーサル



手がブルブル～思うようにいかないぜ！

13 ジョウロ型のヤカンに染料入れ



## 14 いざ本番 バキュームも



焦ってバキュームしないように…

## 15 二人でぼかし染め



あうんの呼吸で！

## 16 一人で挑戦



指揮者のように繊細に！

## 17 染付け終了



土手も決壊することなくひと安心。

## 18 余分な染料と糊を除く洗い作業



じゃぶじゃぶ

## 19 作業終了



優しいご指導のおかげで無事終了！

## 20 脱水して風にさらす



ひとつなぎで長〜い！



## 21 それぞれの作品が完成



本格コースもやってみたいぜ！

といった流れで注染体験をしてきました。特徴的なのは表から染めた後に生地を返して裏側からも染料を注ぐ作業を行うということです。その結果 表裏とも綺麗に染めることができるということで 最初からリバーシブル利用を前提とした形になっています。裏がのぞいても綺麗に染まっているのが“粋(いき)”ということに繋がるのだと思います。オシャレです。

さて参加者の作品の出来栄はといいますと 同じ型で順番に作業をしたのですが仕上がりはそれぞれ微妙に違いが出て同じものにはなりません。オリジナル作品となりましたが初めての挑戦にしては満足いくもののできたと思っています。このコラムを読んで“私もやってみよう”と思った方は申し出てください。今回のショートコース体験は 定員6名とのことです。人数が揃いましたらご案内いたします。季節ごとに柄模様も変わるそうです。



ニッセンケンスタッフの出来上がり

今回は手拭染体験をさせてもらったので手拭いの豆知識をひとつ紹介しておきますと 手拭いの端は切りっぱなしになっていますが縫い目がないことで速く乾くことやホコリが溜まりにくい 雑菌が付きにくく衛生的だということだけで決して縫うのが面倒だからということではないのです。縫ってなければどんどんほつれていくのではと思うかもしれませんが5mm~8mmくらいでほどけにくいものになります。水に濡らすことが多いので合理的なことなのです。

時代劇を見ていると傷口の手当をすとか下駄や草履の鼻緒が切れたときに手拭いを切り裂いて使う場面がありますが 生地の手拭いを縫っていたら簡単には切り裂けません。ドラマの演出ではなく江戸時代でも切りっぱなしにしていざというときに素早く対応がとれるようになっていたようです。今は手拭いハンカチのようなものは三つ巻(みつまき)縫いや三つ折り縫いの処理をしたものが店頭にも並んでいますが 手拭いは端処理をしないのが本来スタンダードなのです。



### みなさんも是非一度 体験を

ということで今回は楽しい体験報告となりました。原稿内の作業手順とコメント 写真は参加者のみんなでもとめてもらいました。今回の手拭染体験をさせてもらったのが「てぬクリ工房」さんで本当にお世話になりました。ありがとうございました。冒頭に書いたように 東京 葛飾 立石にありまして今回のショートコースだけではなく1日掛りの本格コースもあるようですので興味を持たれた方は是非訪れてみてください。葛飾 柴又だけでなく葛飾 立石にも足を運んでみてください。

原稿担当 : 竹中 直 (チョク)  
 自由研究協力者 : 立石ラボ 神崎 江麻  
 村田 貴洋  
 関本 有莉  
 戸谷 佑衣  
 黒田 理恵  
 蔵前ラボ 中西 つばさ  
 写真撮影 立石ラボ 前川 猛

参考 : てぬクリ工房 ホームページ

<http://souzou-kan.info/koubou/>

